

方法マシンにおける美的経験—方法主義再考

大久保 美紀 (パリ第 8 大学)

方法主義は、二〇〇〇年に美術家の中ザワヒデキにより起草され、詩人の松井茂、音楽家の足立智美によって起草立会された方法主義宣言に基づく一連の芸術運動である (二〇〇二年に足立智美が脱退し、作曲家の三輪眞弘が加わる)。その活動とは、機関紙発行や芸術祭の開催を通じ、ポストモダンの芸術を批判し、精神性や感覚に基づく表現を廃した純粋な規則に基づく芸術を追求する、究極の還元主義としてのモダニズムの復権を謳うものであった。五年間の活動を経た二〇〇四年、機関紙『方法』の第四二号を以てグループとしての活動を終止した。

本発表では、二〇〇四年五月の『方法』第三四号で発表された「方法マシン」に焦点を当て、その美的経験の意味を考察する。「方法マシン」とは、方法絵画、方法詩、方法音楽をはじめとする方法による芸術作品を、身体運動を通して現実空間に実現する機械・もしくは仕組みであり、方法主義者が自らの必然において創作した作品を、自らの身体整理の必然において解釈し身体運動に変換する肉体の集合である。十五名程度の構成員と方法主義者含む五名が顧問となり、作品の練習と発表を行った。特権化された身体鍛錬を解釈者に課す「方法マシン」は、前提とされる作品の「実現」を重視する点で、「方法」のみが本質であり「実現」は必要ないとする原理的方法主義とは矛盾した。

作曲家の三輪眞弘による「あたりさま」は「方法マシン」によって演奏された中心的作品である。「あたりさま」は、コンピュータ空間の中で考え出されたアルゴリズムを現実空間の中で生身の人間身体を通じて行う「逆シミュレーション音楽」の作曲技法に基づく作品である。八人の男女が XOR 演算の結果に従い、鈴とカスタネットを鳴らしながら演じるが、高速で完全な演奏を行うには演奏者全員の高い集中力と身体鍛錬を要する。三輪眞弘は『方法』第十五号に寄せた「身体を合成する」というエッセイにおいて、現代という時代の必然性によって生まれる新しい身体性に言及した。それは「あたりさま」が想定するような伝統芸能の世界や古代文明において人類が心の拠り所とした神への信仰が、科学・テクノロジーに取って代わられた現代、機械ならば何の苦もなく完全に演奏できるアルゴリズムを、過ちうる人間身体を通じて敢えて解釈すること、つまり「機械になろうとする人間」が異形の「奉納」を実現することである。「方法マシン」の経験が即ちテクノロジーの受肉を意味するならば、新たな肉体によるその美的経験は、芸術表現としていかなるポテンシャルを持つか。

本研究では、「方法マシン」の独自性およびその美的経験の意味について考察し、芸術運動としては二〇〇四年に幕を閉じた方法主義が、二一世紀の世界に向けて持ちうる芸術的インパクトに光を当てる。

参考文献

方法主義宣言・機関紙「方法」https://www.aloalo.co.jp/nakazawa/method/index_j.html

中ザワヒデキ、「方法」の活動と終焉、『妃 第 13 号』、2005、pp.41-65.

方法マシン。「方法マシン—あたりさま全公案連続演奏会」、2005、p.32。「方法マシン」<http://methodm.s333.xrea.com/overview.html>

IAMAS ARTIST FILE #01 三輪眞弘「逆シミュレーション音楽」の世界 : <https://www.iamas.ac.jp/af/01/> 公益財団法人サントリー芸術財団。「作曲家の個展 2011 三輪眞弘」、2011、p.24.